太宰治

　朝、食堂でスウプを一さじ、すっと吸ってお母さまが、

「あ」

　とかな叫び声をお挙げになった。

 「髪の毛？」

 　スウプに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

 「いいえ」

－27－

 　お母さまは、なにごともなかったように、またひらりと一さじ、スウプをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スウプを小さなおのあいだにりませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決してではない。婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などとは、てんでまるで、っていらっしゃる。